

シネマ通信

第13号 (2024年7月21日)



墓泥棒と失われた女神

第13回鑑賞作品

監督・脚本：アリーチェ・ロルヴァケル

「夏をゆく人々」「幸せなラザロ」他

出演：ジョシュ・オコナー（アーサー） イザベラ・ロッセリーニ（フローラ） アルバ・ロルヴァケル（スパルタコ）

古代エトルリア人の墓を
暴き荒稼ぎする一団
リーダーのアーサーには
他に探すものがあつた

1980年代、舞台はイタリア・トスカーナ地方の田舎町。考古学愛好家のイギリス人アーサー（ジョシュ・オコナー）には、なぜか古代エトルリア人の墓を発見する特殊能力があつた。仲間たちと墓を暴いて埋葬品を売りさばく毎日。しかしアーサーが真に探しているのは、もっと大切なもの。それは、行方知れずの恋人ベニアミーナだ。ベニアミーナの母フローラ（イザベラ・ロッセリーニ）も、アーサーが娘を見つけ出してくれることを待ち望んでいる。

そんなある日、希少価値のある美しい女神像を発見したことで、闇のアート市場を巻き込む大騒動が発生し・・・

空想と現実を飛翔する幻想譚。トスカーナの迷宮で、ギリシャ神話を彷彿とさせる、切ない恋物語に酔いしれましょう。



About Them

「墓泥棒と失われた女神」の監督、アリーチェ・ロルヴァケルは、イタリア人の母とドイツ人の父の間に、1980年トスカーナ州に生まれる。トリノ大学で哲学と文学を専攻した後、脚本の専門スクールで学んだ。2011年には「天空のからだ」で長編映画の監督デビューを果たし、2014年には「夏をゆく人々」で、カンヌ国際映画祭のグランプリを受賞。2018年の「幸福なラザロ」では同脚本賞を獲得し、世界の映画人の賞賛を受ける。英国若手俳優を代表する一人ジョシュ・オコナーは「幸福なラザロ」に感銘を受け、出演を熱望する手紙を自ら監督に送り、今回の主役を射止めました。

第5回観賞作品「3つの鍵」で、夫の出張中に一人で出産する二階の住人を演じたアルバ・ロルヴァケルは、監督と2つ違いの実姉。イタリア映画に脈々と流れるフェリーニ、ビスコンティの遺伝子を現代に受け継ぐと評される、才能豊かな二姉妹に注目！！です。



About Something

「関心領域」を観ました。本年度のアカデミー賞で、国際長編映画賞、音響賞を受賞したアメリカ・イギリス・ポーランドの合作映画です。

10余年前、私は高い絞首台を見上げ立ちすくんでいました。それはアウシュビッツ強制収容所の一角。ドイツ敗戦後に、所長のルドルフ・ヘス（ナチ党副総統とは別人）が処刑されたところです。しかし私を呆然とさせたのは、処刑の史実ではなく、この壁の向こうでヘスが家族と住んでいたというガイドの説明でした。大量虐殺が日常業務として繰り返される隣で、子どもたちは無邪気に学校に通っていたのか？妻はどんな気持ちで夫を職場に送り出したのか？この映画は、まさにこのときの疑問に答えるものでした。

監督は「アンダー・ザ・スキン種の捕食」のジョナサン・グレイザー、原作はマーチン・エイムスの「THE ZONE OF INTEREST(関心領域)」。

この言葉は、収容所一帯を示すナチの隠語だったそうです。映画の冒頭はヘス一家のピクニック風景。続いて友人たちとのガーデンパーティ、プールで戯れる子どもたちと…と、豊かで平和で、幸せそのものの家族のシーンが続きます。しかし、高い塀の向こうには収容所の監視塔や煙突がそびえ、ピストルの音や叫び声、焼却炉を連想させる鈍い音が絶え間なく響きます。そんな中で、夫は情熱的に焼却炉の効率化に励み、妻は隣から運ばれてくるミンクやダイヤを友人に自慢したりします。夫に転勤話が出たときには、妻は同行を拒否し「ここには望むもの全てがあり、健康で、幸せな夢に見た暮らしがある。これこそ総統が示す生き方だ」と言い放ちます。

『愛の反対は憎しみではなく無関心』というマザー・テレサの言葉を思い出しました。そうです。彼らの関心は、自分たちの生活ゾーンのみ。無関心な隣地での出来事に、心を煩わせることはないのです。平日の昼間なのに、映画館は7割近い入り。不思議なことに、エンドロール中に席を立つ人は一人もいませんでした。どんな名画の後でも、私はこんなことは一度も経験したことがありません。

重い音響を背景に流れるエンドロールが、現代人に押し寄せる情報の渦を連想させたのか？私はそのストレスから逃れるために、自身の”関心領域”を狭めてしまっているのではないかと、自らに問いかけていました。20世紀最大の狂気の隣地に実在した、或一家の幸せな日常を淡々と傍観するこの映画には、観客一人一人に自らの内面を凝視させる、不思議な力が潜んでいるのかも知れません。